広報にしはら

発行所
西原町役場
〒903-01
西原町字嘉手苅112番地
電話（09894)-5-4533
印刷
栄光堂印刷

国民年金は三月までに納めましょう！

町内には、十二月三十一日現在三、四八三名の国民年金加入者がおります。

その内、二、二六七名の方が年金の掛金を納めている状況です。

それからしますと、一、二一六名の方が国民年金を納めていないことになります。

その中には、障害年金や母子年金の受給者などの法定免除（一九七名）の方や、自分で役場まで足を運んで申請免除（一四一名）をやった方も含まれています。

その合計は三三八名ですが、それ以外の八八〇名の方が年金の掛金を全く納めていない状況です。

掛金の滞納は大変なことに…

掛金は、現在、月五、二二〇円ですが、納期ごとに納めていただいた方が納入も楽になります。しかも、うっかり納め忘れた場合、六五才になっても年金がもらえない無年金者になったり、予期しない出来事が起こった時など、もらえるはずの障害年金・母子年金などがもらえない場合が出てきます。

こんな例は、すでに実際に何件も出ています。

四〇才前後で無年金者になっている人は、町内だけでも三〇人近くおります。

未納者が八〇〇人近くもいる現実から考えますと、今後も無年金者はだいぶ出そうです。

役場では、無年金者を一人も出さず、すべての加入者に六五才から年金がもらえる〝権利〟を保障するために、各区の事務担任者の方々と協力し、年金の加入を呼びかけし、納期内納付を呼びかけている所です。

昭和五七年度もやがて終ります。

さあ！年度内、三月までに年金の掛金を納め忘れないように今一度、自分の国民年金の納付状況を点検し、まだの方は早目に納付して下さい。手持ちの納付書は三月いっぱいまで使えます。

なお、ご主人が厚生年金（会社員）などで奥さんが国民年金に加入し、長期未納、又は納付困難ほったらかしている方は、早目に喪失手続（やめること）をやった方が得策です。喪失手続をやらないと無年金者となり、今まで払ってきた年金ももらえなくなります。

詳しいことは役場の国民年金担当に〝いつでもお気軽に！〟ご相談下さい。

▲今年も本町各地で緋寒桜の濃紅色の美しい花が満開し、春を感じさせてくれる。ちなみにこの花は、童形で下向き、別名、緋桜とも言われ、沖縄・台湾・中国南部に自生する。

盛春

町の世帯・人口

（昭和58年1月末現在）

世帯数	4,653	世帯
人口	18,038	人
男	9,106	人
女	8,932	人

1月の人口移動

出生	26人	死亡	7人
転入	103人	転出	67人
婚姻	13件	離婚	4件

昭和五十八年度固定資産税課税台帳の縦覧について

地方税法第四一五条第一項の規定により昭和五十八年度固定資産税課税の基礎になる課税台帳を次のとおり関係者の縦覧に供します。

尚、縦覧できる人は本町内に資産を所有する者若しくはその代理人に限ります。

所有者以外の者は、その関係を明らかにする委任状などを持参して下さい。

昭和五十八年三月一日

西原町長　宮平吉大郎

記

縦覧期間　昭和五十八年三月一日～三月二十二日

時間　平日午前九時～午後四時半、土曜日午前九時～十二時

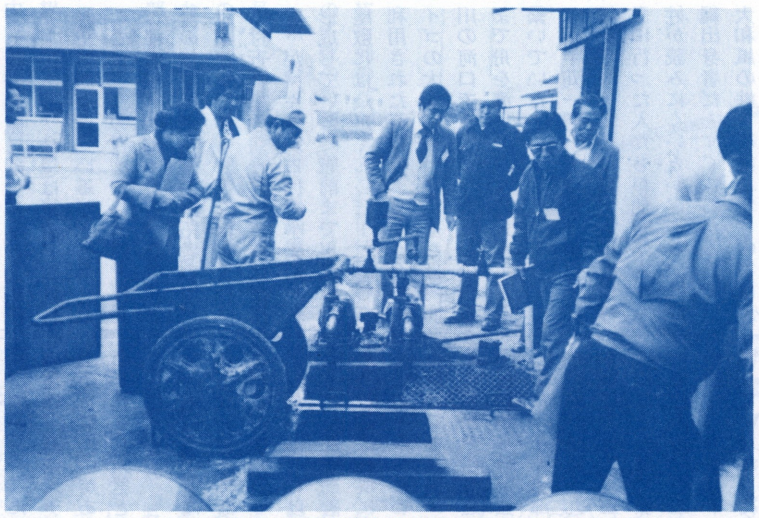
場所　西原町役場税務課

水質汚濁防止月間にちなみ工場、畜舎の立入り調査行う

豊かな水環境の確保をめざす水質汚濁防止月間にちなんで事業所の立入り調査指導が、二月八日午前十時から十二時にかけて行われた。町公害対策審議委員はじめ町関係課職員合わせて十名がこの調査に立ち合った。中部製糖工場を皮切りに、大平養豚場（森川在）、南西石油製油所、拓南商事スクラップ解体工場などを抜き打ちに巡回した。

この調査では、工場及び畜舎の廃水、雨水等の導水路整備、終末処理、維持管理などの状況に主眼が置かれ、水質汚濁の原因となるカ所については事業所に改善を促した。そのほか、産業廃棄物の保管及び処理状況なども見て回った。

町及び町公害対策審議会では、今後ともこの種の立入り調査を継続的に行い、公共用水域の水質汚濁防止に関する指導に努めるとともに自然環境の保全のため町内全域の事業所、一般住民の協力を呼びかけています。



▲立入り調査で工場の廃油処理施設を見ているところ

町民税・県民税の申告のご協力について

町では昭和五十八年度分町民税・県民税の申告を町税務課窓口で受付けておりますので三月十五日までにもれなく申告して下さるようご協力お願い致します。

西原町役場税務課

昭和五十八年度県政モニター募集

県では、県の仕事に対する意見や要望・提言などを広く県民の皆さんから聴取し、県政推進の参考にするため、県政モニターを募集します。

■応募資格　県内に住んでいる満二十歳以上の方（公務員を除く）

■応募方法　官製ハガキを用いて①住所②氏名（ふりがな）③年齢④性別⑤職業⑥勤務先・役職⑦最終学歴⑧応募の動機⑨連絡先の電話番号を明記して下さい

■謝礼　年間約九千円。

■任期　委嘱の日から翌年三月末日まで。

■募集締切　三月十五日（当日消印有効）

■申込先と問合せ

〒九〇〇　那覇市泉崎一の二の三二　沖縄県総務部広報課

☎〇九八八―六六―二〇二〇

燃えるゴミと燃えないゴミは分別して収集日に出しましょう。

はじめに

八区は、掛保久、嘉手苅、小那覇、内間（国道三二九号線の東側の一部）を含み、五五七世帯、二、〇六四人を擁する行政区であり、本町で一番人口が多い。面積は、三・二九平方キロメートルと本町の二一％を占め、これもトップの座にある。

昭和初期に小那覇の海岸沿いに仲伊保（北側）と伊保の浜（南側）があり、南西石油入口の東側の谷間に崎原があったが、戦後米軍によって居住が認められなかったため現在でもそれらの部落だったところには民家はない。

十七世紀中期には、八区の全域はすべて内間村に包含されていたようである。金丸（後の尚円王）が一四六九年頃まで住んでいたと伝えられる内間御殿の名称からしてもそのことがうかがわれる。それは嘉手苅に位置しながら内間と命名しているからである。

まだ定説はないが、小那覇、嘉手苅、掛保久ともほぼ同時代にできた割と新しい部落とされている。

昭和三十四年に米軍から西原飛行場が解放されてからこの肥沃で広大な土地（約五十万坪）は、さとうきび畑としてよみがえった。

他方、昭和四十四年八月から四十六年三月にかけてエッソスタンダード株式会社が旧仲伊保部落の東側の公有水面を六六・六ヘクタール（二〇万一、四六五坪）を埋めたてて製油所を建設し昭和四十七年一月から創業をはじめた。社名も南西石油株式会社に変った。

また、この地域旧仲伊保への企業進出は、目を見張るものがあり年々増加して行き、工業地域を形成してきた。

▲八区（小那覇・嘉手苅・掛保久）の全景、古波蔵ビル屋上から撮影。

◀臨海部北側の工業地域

地理的条件に恵まれているため公共施設が他の行政区に比べて多い。町役場、西原東小学校、町農協、県企業局西原浄水場などがある。

国道三二九号線沿には、給油所飲食店、雑貨店、喫茶店、電気店ケーキ店、銀行、自転車店、歯科医院、診療所、薬局、化粧品店、飲酒店、写真店、会社事務所、ガススタンドなどがにぎやかに軒を並べている。

八区は、いろんな意味で本町の中心的役割を担っている区である。地の利を得て農業、工業、商業のいづれも盛んなところであり、非常に活況に満ちている。

位置

八区は、東西に二・四キロメール、南北に二・四キロメートルの区域で南が十区に接し北が中城村との境界に接し、国道三二九号線から海岸部までの広大な平野部のほとんどの範囲を占め字小那覇、字嘉手苅、字掛保久、字内間（国道三二九号線沿のごく一部）から形成されている。

そして、それぞれの集落の土地状況をみると字小那覇、字嘉手苅字掛保久の住宅等が連なるようにしてひとつの集落形態を成し、小那覇交差点を中心に南北に走る国道三二九号線に沿って帯状に立地している。

部落由来

(一) 掛保久

ここの部落の根屋は當山家である。現在、當山家の子孫はここにはいない。一五〇年前頃、當山家はチネードーリ（家が絶える）になり、その子孫は、大里間切真境名、古堅、与那原、与原等へ転出していった。今でも、そこから根屋である當山家屋敷跡へ拝みにくる。

三〇〇年前頃、中城村屋宣から玉城家がここに移ってきた。その後、城間家が北谷町から来た。當山家、玉城家、城間家の三家が掛保久部落の創始家である。

「掛保久」はカキブクと読み、以前は「掛福」とも書いた。地頭地を領有することを「島を掛ける」といい、その島（村や間切）を某家の掛島といった。廃藩置県（明治十二年）まで、掛保久村は地頭代（現在の町長）の御持ち村であった。その起源は定かではないがおよそ、尚真王代（一四七七～一五二六）のことだと思われる。

地頭代がでた家柄はカキブク（掛福）屋号で呼ばれ、棚原、幸地、小波津、小橋川、安室、桃原、我謝等の部落に掛保久屋号の家が二～三戸づつ残っている。

昭和七年、掛保久の尻原にあった崎原屋取が分離独立した。その後七〇戸から四〇戸ほどに減ったため七〇戸から四〇戸ほどに減った。旧藩時代には貢租の取り立てが厳しかったので、桃原部落と同様発展しなかった。

(二) 嘉手苅

嘉手苅の村名がでてくる最初の文献は「琉球国由来記」（一七一三年編集）である。慶長の役（一六〇九年）頃編集されたといわれる「琉球国高究張」には嘉手苅村は載っていない。一六〇九年から一七一三年の間に嘉手苅村は小那覇や掛保久と同時期に創設されたであろう。古くは内間地内に包括されていた。

部落の北側に御嶽モーと上ヌ松モーがあり、今では国道三二九号線で分断されているが、戦前までここは一つの丘陵であった。そこが部落発祥の地である。嘉手苅部落の根家（創始者・開拓者の家）は東江家である。古くは上ヌ松モー付近に嘉手苅一門（宗家は東江家）がマキョ（古代の小集落）を形成していた。戦前まで東江家の屋敷には「舟くんじばー」として利用された直経一メートル余のデイゴの大木があった。そこは内間川の河口であった。昔はこの付近まで舟を漕いで、その大木に舟を繋いでいたという。

嘉手苅一門の姓は殆どが嘉手苅姓を名乗っていたが、大正期に移民に行った人たちが他府県人から姓が読みにくいとか、あるいは沖縄出身者だとすぐにわかるので、大和風の姓に改姓した。中谷は屋号がナーカ屋だったので、中谷に改姓した。中山姓は戦後「ウフヤー一門は勝連村屋慶名の中山門中の三男バラである」と説く物知りの指示により、嘉手苅姓から中山姓に改姓した。

(三) 小那覇

方言で「ウナファ」と呼び、検地張には「おにゃは」と記されている。小那覇の地名のナハは魚場で、漁がたくさん寄ってくる場所（海浜）である。西原平野の海岸地帯に立地した小那覇部落は昔良い漁場をひかえていたので、ここをナバ（漁場）つまりウナファと呼ぶようになった。

平敷屋朝敏（一七〇〇～一七三四年）の『貧家記』に

おなはといふ所よりふなです

とあるので古くは勝連へもここから船を出していた。

小那覇部落の創始家として三つの門中がある。その中で最も古い宗家として才口門（セーグチジョー）がある。その先祖は五五〇年ほど前に山原（ヤンバル）の久志村汀間からここに移ってきた。その他に、宮城（ナーグシク）門中カーヌ端門中があり、ほぼ同時期頃それぞれ大里と北中城から移ってきた。

一六四八年頃に編集された「琉球国高究帳」には小那覇村が記載されていないので、部落として成立したのはそれ以後のことと思われる。小那覇部落が新しい集落であることは海浜に立地し、御嶽がないことからもわかる。

かって小那覇ヌ下と呼ばれていた仲伊保や伊保之浜が昭和初期に小那覇から分離独立した。

また、小那覇部落の東側に西原飛行場が昭和十九年四月頃から日本軍によって着工されたが、七月頃になると陣地壕の構築や他の飛行場建設のため工事は中断された。当初、日本軍は十五万坪ほどを収容していたが、終戦後、米軍によって五十万坪に拡張整備され、昭和三十四年に解放されるまで米軍が使用していた。

▶解放直後の西原飛行場

内間御殿

内間御殿は嘉手苅部落のほぼ中心にあり、尚円王（一四一五～一四七六）が内間地頭だった時の旧宅である。御殿の周辺には福木の大木が繁茂し、集落内で最も緑の多い場所である。

内間御殿は東の御殿と西の御殿からなっている。石垣遺構があり、かって先王旧宅碑記が建立されていた場が東殿である。そこから北方にあるトタンぶきの祭屋が西殿である。

尚円歿後一九〇年も経ってから旧宅あとに神殿が建てられ、国家的聖地として整備された。

▶尚円王ゆかりの内間御殿

掛保久の親川（ウェーガー）

戦前まで共同井戸として利用され、部落唯一の拝井泉でもある。この井戸は部落のほぼ中央にある。ウェーガーは水が豊富なので、明治三十八年の大旱魃には近隣部落から水をもらいにおしかけた。

戦争でこの井戸は埋もれたが、戦後修復し拝所をつくり、水の豊かさを感謝した。昭和三十八年の大旱魃には、隣部落からトラックで水をもらいにきた。

これと同じつくりの拝所泉が与那原町の商工会敷地内にあり、名称もウェーガーで、掛保久親川と関係がある。

福祉電話のことなら那覇電報電話局（TEL 53－4000）にご相談下さい。

おらがまち(九)

八区＝掛保久、嘉手苅、小那覇

篤志家 中谷善英

明治二五年八月一日、西原間切嘉手苅村のナーカ（屋号）の三男として生まれた。小学校を卒業すると、明治四一年兄弟と共にハワイへ契約移民として渡った。ハワイでは砂糖キビの刈取作業などにしばらく従事していたが、のちにアメリカ本国のカリフォルニア州に渡った。

そこのインペリアル平原の砂漠の荒地を開拓し、そこで野菜を栽培しロスアンゼルスへ出荷し多いに利益を得た。そのうち、野菜の卸売業として大成功をおさめるようになった。

大正八年には在米日本人会の理事兼会計になり、十一年には副会長に推された。その頃にはカリフォルニア州において運輸業も手広く営むようになり、本県出身の第一番の成功者になった。

同氏は、海外にあってもたえず懐かしの郷里を忘れず、辛苦艱難裸一貫から稼ぎ貯めた金を惜気もなく郷里に送った。

昭和初期に便所改良費として字嘉手苅に分与えて見事な西洋便所を一斉に建設させた。昭和六年には内間御殿の南側にコンクリート造りの鳥居を帰朝記念として寄進した。昭和十年、元県立第二中学校長志喜屋孝信氏と相計り、多額の校舎建設資金を出資して開南中学校を設立した。

昭和十二年、西原小学校に六〇〇円のピアノを寄贈して村民から感謝された。また、政争（白黒争い）の村であった西原村を一つにまとめ政争を解消させた功績は大きい。

戦後もまた焦土と化した西原村の復興に多大な貢献をされた。一九六七年二月十二日、ロスアンゼルスの自宅にて惜しくも亡くなられた。享年七十四歳。

出移民

掛保久では明治三八年にメキシコへ炭抗夫として三名が行ったのが移民の始まりである。新川永起氏、城間蒲氏、玉城亀氏の三名であった。その後、アルゼンチンへ十二名が渡り、昭和十年頃には南洋へ多数移民して行った。

嘉手苅では明治末期頃、前ヌ仲（屋号）の中谷善一（長男）、善考（次男）、善英（三男）と嘉手苅貞昌氏ら四名がハワイへ渡航したのが移民のはじまりである。その後、呉屋仁和氏がアメリカ合衆国へ、屋号前玉那覇がブラジルへそれぞれ移民した。また、ペルー国へイリーの兄弟が、アルゼンチンへ二名、南洋へ三名等多くの人たちが移民して行った。

小那覇は沖縄一の移民部落であった。最初の移民は明治三八年四〇年頃、ハワイへ契約移民として渡った玉那覇武太氏と新川氏の二人である。その後、ハワイへは呼寄等により五十名余の人たちが移民した。また、メキシコへも炭抗夫として明治三七年頃新垣山、新里（才口小）らが行った。明治末期頃、アメリカ本国へ玉那覇兄弟が渡航した。現在、同字出身の移民者の二・三世を含む海外在留者数は同字の人口に匹敵する。

年中行事

かって旧西原飛行場一帯は水田地帯で小那覇コージャー米の名産地であった。そのため豊作祈願の綱引は盛大に催され、他部落からも大勢の見物人が押しかけた。

また、小那覇は「遊び小那覇」と称されるほど村芝居や毛遊びが盛んだった。とくに、綱引や村芝居が行われる前の『道じゅねー（仮装行列のパレード）』には村内外の多数の見物人がおしかけた。

綱引　かって小那覇では旧六月一五日の御祭綱と旧六月二五日の御初綱の二回の綱引が毎年行われた。御祭綱は御願綱とも呼ばれ、部落の少年らによって行われた。組分は部落の大通りを境に前組（雄綱、一、二、三組）と後組（雌組、四、五、六組）とに分け、門中や親族によってではなく、住居を構えている場所で分けた。ワラの徴収は各戸の田の持分に比例して集めた。綱の長さが三〇間（五四メートル）、直径二尺五寸（七〇センチ）もの大綱であった。

村芝居　旧八月十五日に村屋（公民館）の広場で催された。村芝居のために青年たちは一ケ月以上も前から練習に励んだ。村芝居の上演には多額の経費が必要だったので、毎年は挙行できず七年毎に行われた。

村芝居が上演される前に綱引と同様、棒や獅子を先頭にして「道じゅねー」をやった。主な出し物は組踊「姉妹敵討」、「伏山敵討」、「手水の緑」などであった。

門中

掛保久には中城村屋宜から移ってきた玉城門中、宗家が北谷町にある城間門中、それに新川門中の三門中がある。今大戦で十五世帯もが一家全滅になったが、戦後、南洋から引揚げ等により四十戸ほどが部落にもどった。

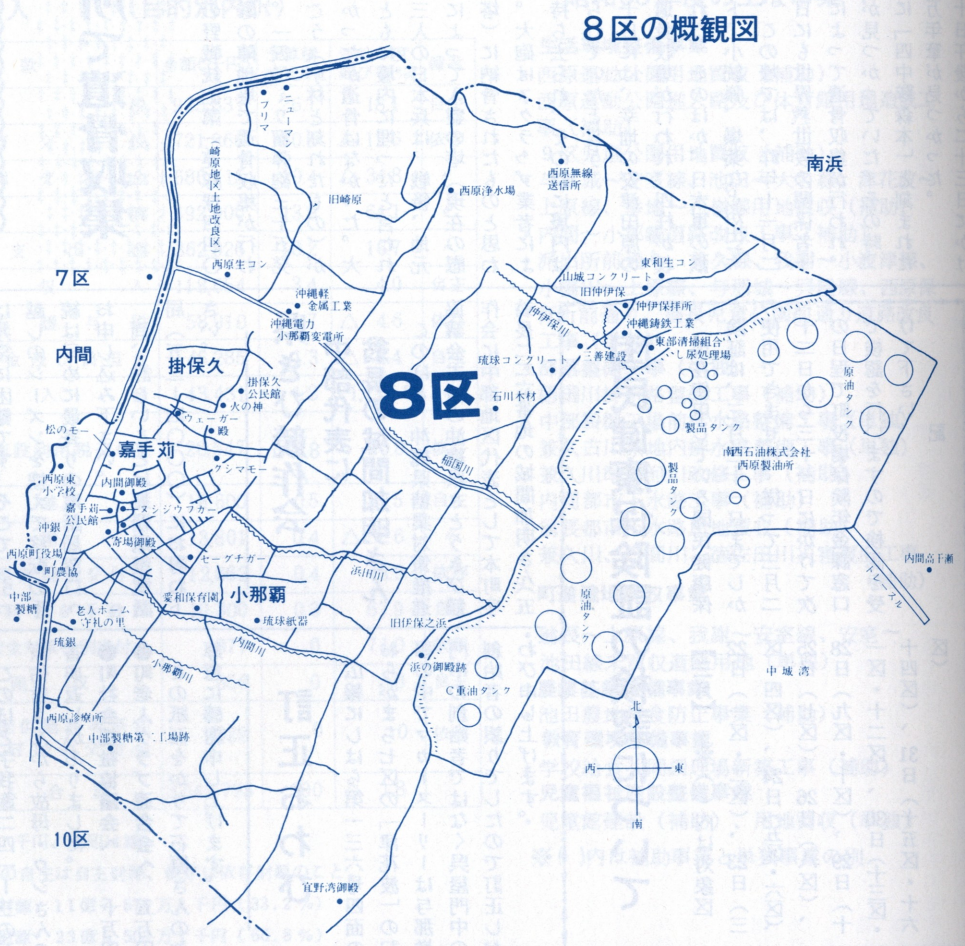
嘉手苅には根屋である東江一門、勝連村屋慶名の中山門中の三男バラであるといわれる大屋一門（戦後、本家の中山門中にならって嘉手苅姓から中山姓へ改めた）、内間御殿守を勤めた西江門中（姓は呉屋）、大屋一門からの分れである仲一門（姓は中谷）等の門中がある。

小那覇の主な門中として、最も古い門中である才口門中（五五〇年前頃久志村汀間から移り住んだ。姓は玉那覇）、大里村高宮城の宮城家の三男がここに移り住んで才口家の娘を嫁にしたのが始まりだという宮城門中（姓は玉那覇）、四五〇年前現在の北中城村安谷屋から来たカーヌ端門中（姓は新川）等がある。

▲八区の繁華街・小那覇三差路付近、国道329号線沿に商店が立並び本町でも最もにぎやかなところである。

8区事務担任者
外間惟正

▼人口＝二、〇六四人▼世帯数＝五五七▼面積＝三・二九平方キロメートル▼人口密度＝六二七人（一平方キロメートル当り）▼耕地面積＝二七・八四ヘクタール▼さとうきび生産＝二、三二六トン▼事務担任者＝外間惟正▼老人クラブ会長＝玉那覇馨▼婦人会長＝玉那覇光子（嘉手苅）、中山則子（小那覇）▼嘉手苅子ども育成会＝外間政弘、なかよし子ども育成会＝新里マサ子▼青年会長＝新川敬信▼名所・旧跡＝内間御殿クシマモー、松のモー、寄揚森殿、リージヌ前、仲伊保の拝所（長島御獄）、浜の御殿跡、宜野湾御殿跡（現在の南国養豚団地の北側）▼公共施設＝西原町役場、西原町農協（本庁）、東部清掃施設組合し尿処理場、県企業局西原浄水場、西原東小学校、社会福祉法人特別養護老人ホーム守礼の里、電々公社西原無線送信所



引っ越し時の手続　転出・転入届をお忘れなく！

菊出荷最盛期を迎える

本町の菊生産農家四十五戸では、昨年十二月から東京、大阪向けの菊を出荷しはじめ、三月には、菊出荷の最盛期を迎え、農家では忙しい毎日が続いている。四月まで菊出荷は続けられるが、今期の生産見込みは、大菊小菊合わせて三九七万本が予想されている。生産数量は年々増加し、農家戸数も昨年に比べて一〇%増え、本町の花卉（菊）農業も順調に発展してきている。生産面積は九・九ヘクタール（三万坪）である。

ちなみに今年の本町の売り上げ代金は、二億一、六四〇万円が見込まれているが、諸経費を差し引くと純所得は、売り上げ代金の三四%の七、三五八万円と菊関係者は見ている。一戸当りの平均純所得は一六四万円程度。

植えつけてから長雨にたたられた影響で秀品率が落ちているものの菊の一本当り平均価格は、大菊（大平）が六十円台、小菊が五十円台に乗っている。特に小菊は昨年に比べて高値を呼んでいる。今期はみどりかね虫（害虫）発生による被害も大きく収穫も二〇%程度落ちた。

菊栽培は、株の差しめから収穫まで約百五十日かかると言われ、開花期を遅らせるために六週間の電照を行い肥培管理には人手がかかる。経営面では、純所得率を上げるのは限度があり、課題も大きいようである。

町農協の職員の話によると菊のほかに観葉植物の栽培が計画され、二～三戸が輪番で一種類の品種の栽培に手がけると言われ、花卉経営の拡大と所得向上が図られているものと期待されている。

▲大菊を手入れしているところ

第二回町子ども会発表会賑わう

子ども会活動の成果を発表することによって今後の活動に役立てようと一町子ども会育成連絡協議会（上亀直一会長）の第二回発表大会が二月六日午後二時から町中央公民館で開かれ、実践報告、舞台発表、展示出品などが行われ大いに賑わった。会場には、各子ども会の会員をはじめ子ども会育成会の会員など関係者約四百人が詰めかけた。

主催者を代表して上亀会長が、「子どもたちを正しく理解し、我が子も、よその子も皆同じように大切に育てていき、実りある豊かな活動を推進していこう。」とあいさつをした。その後、宮平吉太郎町長と小川正元教育長から祝辞を受けた。

▶各子ども会による舞台発表

発表会では各子ども会の活動内容や九州地区JL大会、子ども会リーダー研修会などに参加しての体験が報告された。

舞台発表は、ジュニアリーダーの司会で琉舞のほか合唱、ダンス、カンフー、合奏などが披露され、にぎやかであった。

他方、子どもたちの書道、絵、おりがみ、人形、竹細工、郷土民具などの展示出品もあった。

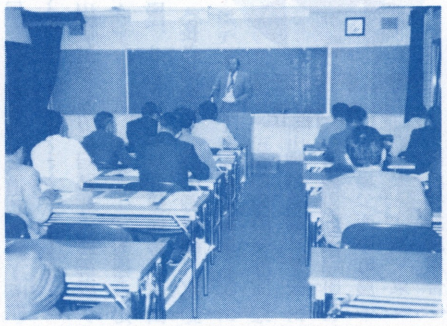
ちなみに同協議会が、昭和五十六年二月に結成されてから町内各区で子ども会結成の気運も高まり、現在では、二十四の子ども会を数え、青少年の健全育成に大きな成果を挙げている。

また、その日、町更生婦人会（玉城俊子会長）から同協議会に「青少年健全育成に役立てて下さい」と五千円の寄付があった。

町商工会の地域懇談会終わる

西原町の基本構想に基づく商工業広域都市づくりをめざして町商工会主催の地域懇談会が二月十八日午後六時半から文化センター金秀で行われ賑わった。町商工会の関係者をはじめ町職員など二十六名が参加して行われた。

席上、社会経済研究所の平良恵三先生を講師に招き「商工業広域都市づくりについて」と題して講演が行われ、商工業の立地条件、都市再開発事業の導入、制度資金の利用、産業教育（施設の導入）などが説かれた。講演会は午後八時半まで行われたが、その後、引き続き、参加者による懇談会に移り、参加者は新しいまちづくりに対して新たな認識を深めた。


▶地域懇談会での講演のもよう

厚生省が町内三カ所で遺骨収集

厚生省の遺骨収集団による本町での沖縄戦没者遺骨収集は、二月十八日から二十三日にかけて町内三カ所の壕で行われ、合わせて六柱を収骨した。

十八日、十九日には、小波津の後原の野戦銃砲第一連隊球四四〇一部隊の陣地壕で遺骨収集が行われた。一五〇ミリ榴弾砲三十五発や飯ごう（小林と刻れたもの）が見つかったが遺骨はなかった。大砲とともに壕内に埋ったと言われる十三人の日本兵は、戦後、地元住民によって入霊の塔（現在の慰霊の塔）に納骨されたものと思われる。大砲はスクラップ業者によって持ち去られ、その時に壕内は開けられていたと言う。

二十日には、幸地の安津田原の壕で遺骨収集が行われ、四柱が収骨された。そのほか、日本軍の鉄カブト、小銃弾、爆薬などが出た。また、この壕では、昨年十一月二十八日にも世界救世教の関係者十三人によって遺骨収集が行われ、五柱が見つかっていた。その時、遺品に「四中隊森本」と刻まれた高級万年筆が見つかった。

二十日午後から二十三日にかけては、幸地の谷那堂の球部隊の陣地壕で行われ、二柱が収骨された。そのほか、一五〇ミリ榴弾砲三十三発、小銃弾、手りゅう弾、ガスマスク、飯ごう、水筒、工具箱、エンピ、シャベル、鉄カブト、小銃、重機関銃などが類々と出てきた。

遺品には、「第五班新垣」の飯ごう、「サイトウミノル」の水筒、「クドウ」の飯ごうが見つかった。厚生省の高野担当官によると「これらの遺品は、持ち帰って戦没者名簿と照合した上、遺族に帰してやりたい」と話している。

▶谷那堂壕から出た数々の遺品

電話の移転手続はお早めに

三月、四月は転勤を始め就職、卒業、入学あるいは結婚と、人の動きが最も活発な時期です。これに伴って電話の移転も三月から五月に集中し、窓口も大変に込み合います。特に、例年多いのが引っ越しの直前の電話移転の申し込みですが、この場合、希望日の工事は非常に困難です。そこで、引っ越しのシーズンを控えて移転の手続は早めに最寄りの電話局窓口へお申し込み下さい。

尚、詳しいことは那覇電報電話局（五三一四〇〇〇）にお尋ね下さい。

県きび競作会
中部代表に翁長の城間加明さん

このほど、沖縄県糖業対策推進協議会主催の沖縄県さとうきび競作会に中部地区代表として本町字翁長二二六番地の城間加明さん（五八歳）が参加した。

競作会は、二月に行われたが、さとうきびの十アール当りの生産高（茎重量）やブリックス（糖度）、可製糖量（砂糖がつくれる量）などで審査された。

耕作面積が、六〇アール以上である農家を対象に県内五地区の代表者で競作会が行われた。

香典返し

このほど字我謝二四一一三の石原佑哲さんから故母・ウシさんの香典返しがありました。

●町社会福祉協議会へ　十万円
●町老人クラブ連合会へ　五万円

この紙面をかりて石原さんのご厚意に感謝申し上げます。

訂正おわび

広報にしはら第一三六号四面のおらがまち七区の「津花波」の記事の中でマカースーリーは与那嶺門中の創始者ではなく呉屋門中の創始者の誤りでしたので訂正しおわび申し上げます。

国民健康保険証の検認について

現在使用している国民健康保険証は、三月三十一日までしか使用できません。従って三月二十二日から三十一日にかけて次の日程で町役場保険年金課窓口で検認を行いますので検認を受けて下さい。

記

【三月】※（）内は対象区
22日（一区・二区）、23日（三区・四区）、24日（五区・六区）、25日（七区）、26日（八区）、28日（九区・十区）、29日（十一区・十二区）、30日（十三区・十四区）、31日（十五区・十六区）

公民館学習発表会は3月27日午前9時から中央公民館で　あなたも一緒に一日入門教室に参加してみませんか。